



北陸地域の概要（2021年11月調査）

一般財団法人 北陸経済研究所
地域開発調査部研究員 吉田聡子

景気の現状判断 飲食や旅行、交通関連が好調を維持し現状DI値は高水準

3か月前と比較した現状判断指数(DI)は、前月から1.8ポイント下落したものの56.5と引き続き高水準を維持している。「新規感染者数が減少傾向で収束状態とみられることから、週末を中心に観光客がかなり増加している。緊急事態宣言前の状態に戻っており、タクシー利用が増加し売上が上がっている(タクシー運転手)」、「平日は修学旅行の団体客、週末は直前に予約した個人客の増加など、旅行目的の宿泊客に回復の兆しがみられ、前月より稼働率が10%以上アップしている(都市型ホテル)」、「季節要因もあるが、昼はかなり人が戻っている。夜も人が戻りつつあるようにみえる(一般レストラン)」と観光や飲食が好調。一方、半導体不足にあえぐ業界からは「端末の納入が需要に間に合わず、予約した商品を渡せないため販売数が伸びない(通信会社)」、「自動車の減産が長引き、受注はあるものの売上に結び付かない状態が続いている(乗用車販売店)」と厳しい声が出ている。

景気の先行き判断 好調を維持できるか、先行きの判断は分かれる。新変異株へも警戒感

3か月先を占う先行き判断指数(DI)は3.7ポイント下落の52.6となった。「新規感染者数が抑えられている状況が続けば、催事が多い12～1月における販売量の伸びが期待できる。年明け以降に旅行などの経済対策による後押しが加速すれば、ある程度先までの消費回復が期待できる(その他小売[ショッピングセンター])」という一方で、「年明けから商品の値上げが控えている。今回はかなり大幅な値上げとなるため、業績の悪化を懸念している(スーパー)」、「現在は県民割引の利用が盛況だが、1月末で終了するのでその反動がある(高級レストラン)」、「特需やリベンジ消費がやや落ち着いた気味となる。現況がやや出来過ぎと考える(コンビニ)」と慎重な見方も出る。さらに「せっかく外出や消費行動が回復し活発化してきたところに、空港検疫で国内初感染者が確認された新型コロナウイルス新変異株が脅威である。2～3か月後のバレンタイン商戦が心配(百貨店)」との声もあがる。

図1 景気の現状指数(DI)の推移[季節調整値]

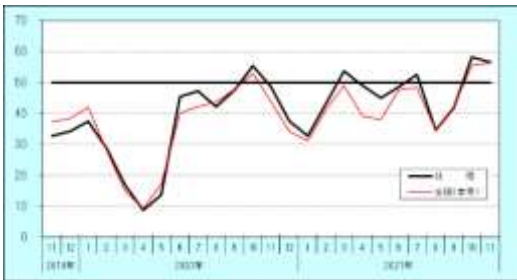
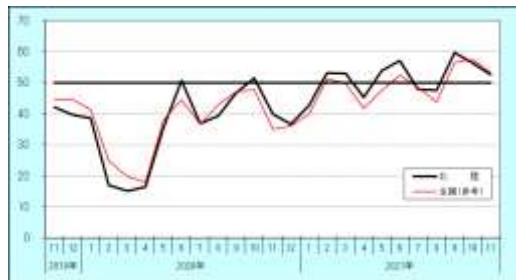


図2 景気の先行き指数(DI)の推移[季節調整値]



●11月のアンケート内容

調査期間：2021年11月25～30日

調査対象：合計100名(うち回答者94名)

- (内訳) ・家計動向関連
- ・企業動向関連
- ・雇用関連

●景気の判断指数(DI)の算出方法

景気の現状や先行きに対する5段階の判断に、それぞれ以下の点数を与え、これを各回答区分の構成比(%)に乗じて算出している。(良い=+1、やや良い=+0.75、変わらない=+0.5、やや悪い=+0.25、悪い=0) DIが50の場合には、景気は「横ばい」、50を超えると「改善」、50を下回ると「悪化」を示す。

内閣府「景気ウォッチャー調査」は景気の動きを敏感に観察できる立場の2050人を対象に全国12地域で毎月実施され、北陸地域では当研究所が100名を対象に調査している。本誌の北陸地域の概要は当研究所の責任で取りまとめたものである。なお、調査内容は内閣府のホームページで毎月第6営業日に公表されている。

※ 詳細は2021年12月27日発行の「北陸経済研究2022年1月号」をご覧ください。